

立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之

立命館大学理工学部 学生会員 ○西本 幸司

1. 研究目的

平成10年開設予定のびわ湖ホールは、京阪石場駅から琵琶湖に向かって5分ほど歩いた打出の森の埋立地に建設されている。従来の景観計画では、歴史的な都市の空間構成を重視する視点が欠けていたため、歴史的都市でも個性が失われてきた。そこで、東側はなぎさのプロムナードから膳所駅、西側は浜大津駅・大津港から大津駅までのホール周辺を対象地区として、景観整備計画を立案した。本研究では、この計画で特徴的な点である歴史的な文脈から、基本的な計画コンセプトを明確にするとともに、その報告書の一般人向けのビジュアルな電子ブックを制作したことを紹介する。

2. 研究方法

本研究では、歴史の専門家へのヒアリング、古地図の分析、現地調査から問題点を提起・整理するとともに、基本的な計画コンセプトを明確にする。そして、それを基にエキスパンドブックというソフトを用いて電子ブックを作成する。

3. 対象地区の位置づけ

現在びわ湖ホールが建設されている打出の森は、その昔松本村・馬場村と呼ばれた地区内に存在している。ここは丘が湖に迫った地域で、湖と丘とが狭い街道町でぶつかりあう出会いの場所であると同時に（図-1参照）、長い東海道が最も湖に接近する地点で、琵琶湖に接する都市の中で陸海の交通が最も接する地点であると言える。またここは、浜通、中町通、京町通（旧東海道）の3つが合流して1本の旧東海道となる合流地点、逆に言うと1本の旧東海道が3本の道に分岐する分岐点であり、港町の旧大津市街地からの街路と城下町の旧膳所からの街路とがぶつかりあう東西の出会いの場でもあった。湖とのつながりを見れば、この地点は昔、旅客や漁業などで栄えていたことがわかる。また、矢橋へ渡すための石場の港があり、塩津や海津などの湖周の各地とつながる就航拠点であった。このように、今回対象地区としたびわ湖ホール周辺地域（特に旧松本村・馬場村）は、地形、歴史的背景、歴史的な交通、都市プラン等の観点から見て、様々な人々が多面的に出会う交流拠点として位置づけることができる（表-1参照）。

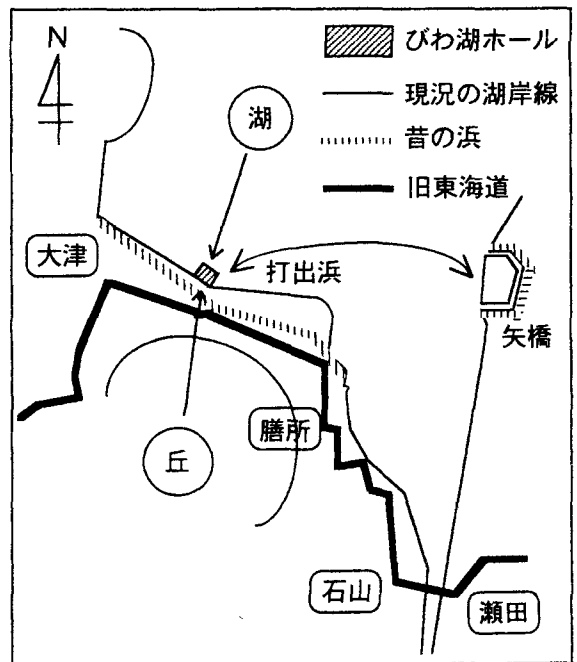


図-1 対象地区の位置づけ

中でも特に、旧東海道と浜通・中町通・京町通の交差点は、この地区にとって重要な結節点である。それは京阪石場駅の裏側に位置することから、交差点、駅、びわ湖ホールを結ぶ縦の軸線を強化することによって、近年分断されていた丘と湖を再び結びつけることができる。

表-1 対象地区の境界性

地形	丘	湖
歴史的背景（市街地）	大津（港町）	膳所（城下町）
歴史的交通	東海道（陸路）	矢橋渡船（水路）
歴史的背景（地方）	畿内（京都・大阪・神戸）	東山道（彦根・長浜・大垣）

4. 電子ブックの構成

以上から報告書を作成し、それを基に電子ブックの作成を行った。このブックは基本的には本文テキスト、レイアウト素材、注釈素材の3つから構成されている。この際、本文テキストとはブックの大本となる文章のことを、レイアウト素材とは本文テキストに添える挿絵や背景に使用するグラフィック素材、あるいは本文グラフィックに添えるキャプション用のテキストなどのことを、注釈素材とはページ上にレイアウトされず、マウスをクリックしたときにはじめて画面に表示される素材のことをそれぞれ指し示す。レイアウト素材や注釈素材には、写真をはじめ図や地図、表やグラフ、そして注釈テキストなどが使用されている。そして、その1つ1つは参照ファイルとして取り込まれている

ので、あらゆるページからリンクされており、マーカーがついているものが同じ文字同士であれば同じ注釈素材を展開できるようになっている。従来の報告書と異なる点としては、報告書では1つの用語に対する写真や地図やグラフは報告書内に1度しか載せられないが、電子ブックの場合は注釈を設定することによって、同じ用語が出てくる度に1つの写真や地図などにリンクさせることができるので、ページをめくり返すことなく、いつでもその用語を図表で確認できることがあげられる。また、本では表すことの不可能な動画やサウンドを取り込んだり、同じ用語に何種類もの写真を注釈設

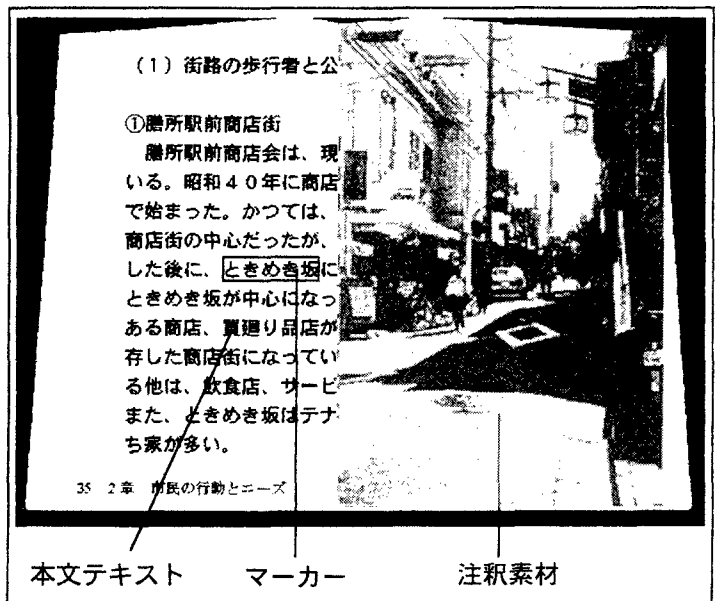


図-2 電子ブックの構成

定しておくことによって、その用語をより多方面から確認することができる。だが、文章だけでおよそ130ページはある報告書を画面上で見えていくには読者にとってかなりの困難が予想される。報告書を電子ブックにする際には、まず文章の簡略化やグラフィック素材の積極的な活用、動画やサウンドの導入などによって、より動きのある、読者に飽きのこさせない工夫が必要である。